

平成21年 4月30日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2009

課題番号：18300201

研究課題名（和文） 学習者理解を促す体育教師教育プログラムの開発

研究課題名（英文） Developing PETE program for promoting learner's understanding

研究代表者 大友 智 (OTOMO SATOSHI)

群馬大学・教育学部・准教授

研究者番号：90243740

研究分野：体育科教育学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：体育教師教育プログラム 学習者理解

1. 研究計画の概要

本研究の目的は、学習者理解を促すための体育教師教育プログラムを開発することである。具体的には、(1)学習者理解を促す体育教師教育プログラムを開発すること、(2)学習者理解を促す体育教師教育プログラムの効果を実証的に検証すること、である。

(1)第一に、学習者を主観的に省察し分析する視点からプログラム開発を継続している。

大学並びに大学院に在籍している学生を対象に、学習者理解が学習計画並びに教授行為の変容の可能性に与える影響について検討している。特に、授業に対する省察が学習者理解を促す可能性とその理解度を高めるための指導方略について検討している。

そのため、昨年度は、教育実習前の大学生並びに教育実習生を対象に、変容の可能性を模索した。その結果、学習者を想定した学習計画や教授行為の変容を促すには、まずは、教科内容に関する知識を一定程度習得しておく必要性が示唆された。

(2)第二に、学習成果を高める授業プログラムを開発し、そのプログラムの実施を通して、大学院生が学習者の理解を促すかどうかを検討している。

一昨年度公表した小学校におけるボール運動に関する体育授業プログラムを、教員養成課程における教職科目である体育科指導法で実施できる授業プログラムとして試作し、その授業プログラムを大学生が対象である体育科指導法で実施した。次に、大学院生に試作した授業プログラムを提供し、指導しやすいように大学院生に修正させ、同種の授業で実施させた。そして、大学院生の学習者

の理解が促すことができるかどうかを検討している。

2. 研究の進捗状況

(1)第一に、教材内容についての知識が授業計画能力及び教授行為に与える影響について明らかにするために、バレーボールのオーバーハンドパスの学習を対象に、「教材内容についての知識が授業計画能力に与える影響を明らかにすること」を主題とする研究課題1と「教材内容についての知識が教授行為に与える影響を明らかにすること」を主題とする研究課題2に取り組んだ。前者の対象は、教育実習前の4年生3名であり、後者の対象は教育実習生3名であった。

データの収集に際しては、本人達が作成した学習指導計画等のドキュメント、本人達の授業中の教授行為に関する映像並びにインタビューのテキストである。これらのデータにメンバーズチェックをかけるとともに、トライアンギュレーションをかけることでデータとしての信頼性、妥当性を確保した。

その結果、前者の場合、学習者を想定した教授行為を営むことが難しいことが確認できた。後者の場合、教科内容に関する知識の量や構造化の程度が授業中の実際の教授行為に影響を与えていることが確認できた。

昨年度は、少人数の被験者を対象に、データの収集、分析方法に関して信頼性、妥当性が確保できるようになった。

(2)第二に、授業プログラムの開発及びその授業プログラムの成果を確認することができた。その授業プログラムを、教職科目の体育科指導法で実施できる授業プログラムに修正した。そして、1名の大学院生がその

授業プログラムを修正し、それを用いて実際に指導した。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

計画していた研究は、現時点ではおおむね順調に進展してきた。その理由は、学部学生や大学院生の学習者理解の程度を判断するためのデータの収集、分析手法に目処がもてるようになってきたと考えることが大きい。これにより、今後、対象者数を増やしていくことも可能になると考えるためである。

4. 今後の研究の推進方策

しかし、このような知識の習得は短期間では難しい。また、短期間でその理解度を深めることも難しい。このような状況を打開して行くには、集団による学習計画の検討を進めるという方略が考えられる。集団で学習計画を作成し、その実現状況を観察、評価する機会を設定することで、学習計画に即した学習者理解が促されると考えられる。この効果が検証されれば、学習者理解を促すための指導方略についても示唆されることになる。今年度は、この課題に取り組みたいと考えている。

また、対象となる大学院生数を増やし、学習者に対する理解を促すかどうかについて、検討を進める。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 18 件)

- ① Norikazu Morisaki、Yoshinori Okade、Takumi Kobayashi、Takio Kurita、A Study of the Relation between Teaching Experience in PE and the Evaluation of Sports Game Video、International Journal of Sport and Health Science、Vol.6、33-44、2008年、査読有
- ② 荻原朋子、岡出美則、鬼澤陽子、須甲理生、中学生を対象としたオーバーハンドパスに関する素朴概念の特徴、体育科教育学研究、24(2)、13-28、2008年、査読有
- ③ 鬼澤陽子、小松崎敏、吉永武史、岡出美則、高橋健夫、小学校6年生のバスケットボール授業における3対2アウトナンバーゲームと3対3イーブンナンバーゲームの比較ゲーム中の状況判断力及びサポート行動に着目してー、体育学研究、53、439-462、2008年、査読有

[学会発表] (計 21 件)

- ① 久保田圭祐、大友智、教師の特性及び学習指導計画が授業場面量及び学習従事量に

及ぼす影響の検討:小学校体育授業におけるボール運動領域を対象として、日本スポーツ教育学会、2008年10月11日、奈良教育大学

[図書] (計 3 件)

- ① 大友智編著、国立大学法人群馬大学・群馬県教育委員会、小学校における体育授業プログラムの開発:ゲーム領域及びボール運動領域を対象として、2007年、247頁

[その他]

ホームページ

<http://tsukubapel.taiiku.tsukuba.ac.jp/>

<http://www.gunma-u.ac.jp/>